

3. ≪「和同開珎」(わどうかいちん) に秘められたメッセージ≫

武蔵国秩父産出の和銅が天皇に献上されるや、電光石火のごとく平城京への遷都が決定され(注1)、「和同開珎」が発行されます。用意周到に画策されたと考えます。では、そこに秘められたメッセージは何でしょうか？

当時造営中の藤原京を捨ててまで遷都しなければならない理由は、藤原京が低平地に立地し度重なる浸水を被ったからだと推察します。この藤原京失敗を隠蔽し、逆に権力強化を狙ったシナリオが、秩父の和銅献上だったわけです。

では、なぜ銅なのでしょう？ 中央集権の権威を確立する象徴として、唐の銅銭に倣い、同等の国産銭貨が必要だったからだと推察します(注2)。

では、なぜ秩父なのでしょう？(注3) そこには、東北平定を目指す上で重要となる東国支配を確立できたと、内外に強くアピールしたかったからだと推察します。

この隠された意図は、古事記と日本書紀の記述からも読み取れます。日本書紀は、平城京遷都後に正式な官史として古事記を編纂し直したものです。両書には、大和政権の正当性を主張するため、ヤマトタケル(漢字で倭建または日本武と表記)が辺境の地を平定する物語が挿入されているのですが、その遠征ルートが違うのです。

日本書紀では、出雲の平定は書かれず、逆に東北に足を伸ばし、その帰途の段階で武蔵国、上野国のルートが書き込まれます。つまり、平城京遷都後において、出雲は大和朝廷側に変更され、武蔵国など東国全域を平定したことを強調しているわけです。これは、東国経営を本格化し、東北平定への足がかりを付けることが最重要課題になったからだと推察します。(注4)

なお余談ですが、ヤマトタケルが東国を平定して帰るとき、峠(坂)に立って振り返り、東京湾に身を投げた妻を偲んで「吾妻(あづま)よ」と嘆きます。これから東国を「あづま」と呼ぶようになります。峠に関しては、古事記では東海道へ抜ける足柄(あしがら)峠とされ、日本書紀では東山道へ抜ける碓氷(うすい)峠とされています。

その峠を「関」と考えて東国は「関東」となり、8カ国の律令国で構成されていましたから「関八州」という言葉が生まれます。また峠(坂)の東側というこ

とで「坂東」も関東の意味で使われます（注5）。

注1：和銅が朝廷に謙讓されたのは、慶雲5年正月（708年2月）。年号を和銅に変更したのが、慶雲5年1月11日（708年2月11日）。平城京遷都の詔発布は、和銅元年2月15日（708年3月15日）

注2：唐の銅銭「開元通宝」を真似て「和同開珎」が造られた。「和同開珎」には、銅銭のほか銀銭も築造。

注3：白村江の戦い（663年の百済・日本の連合隊と新羅・唐との戦い）後、朝鮮から日本へ渡来した技術者が、武蔵国に多く移住しましたが、彼らの活躍があって、この和銅鉾脈の発見に繋がったと推察。なお朝鮮に縁がある地名の高麗郡（現埼玉県下）が716年に設置。

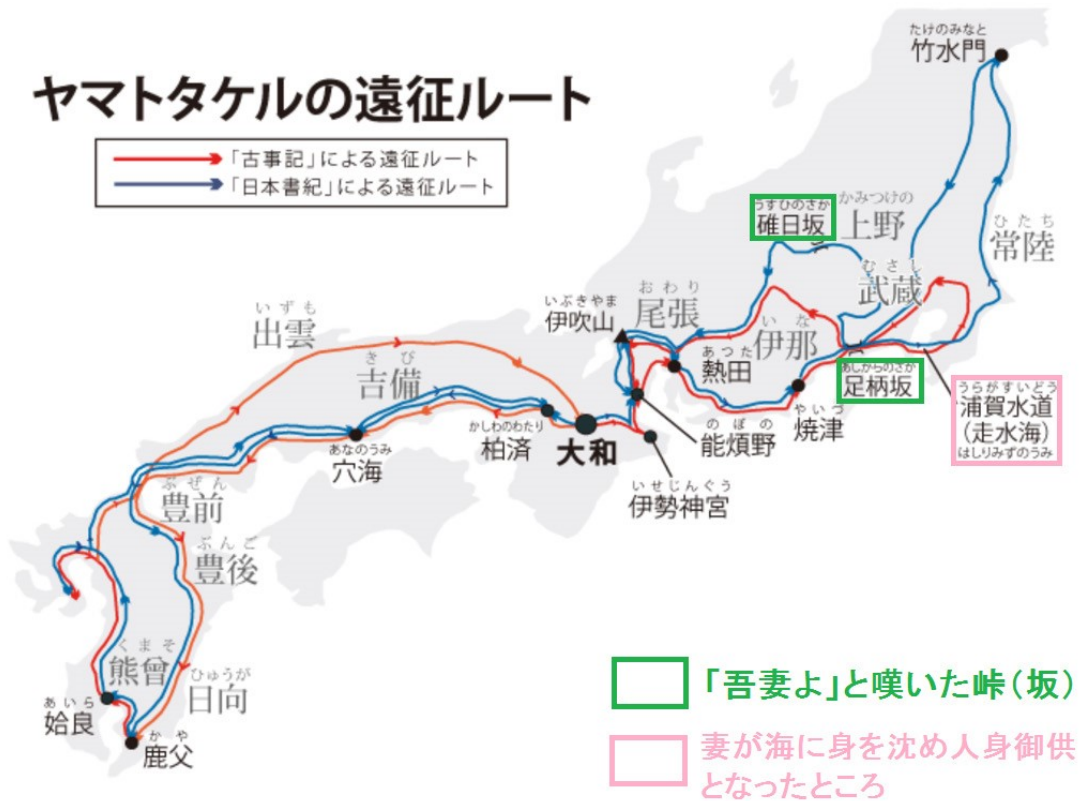
注4：東北平定が本格化するの、724年（神亀元年）拠点となる多賀城を築いてからとなります。

注5：「関東」「関八州」の「関」はどこか、また「坂東」の由来は、諸説あります。当時の日本の感覚からすれば、東国は中部地方より東の漠然としたエリアと認識していたと考えられ、むしろ「記紀」の記述から逆に地域名が確定化していったと考えます。

写真は、①ヤマトタケルの遠征ルート（やはたの杜から（盛岡八幡宮）やまとたける⑤の地図に細見が加筆）、②Yahoo 地図航空写真に和銅採掘遺跡を示し、和同開珎は七十七銀行ザイバー金融資料館より（細見作成）

①

ヤマトタケルの遠征ルート



②

